

猿の話（二話）      = = =      三州横山話より

猿の祟り

猿は、昔は空模様でも変わりそうなときに、幾十となく群れて来て、栗や黍を荒らしたものだそうで、その中の一つはかならず小高いところに立って、物見の役を勤めていたと言います。山で椎茸を培養する時は、猿が来て食べて仕方がないということを知りました。



北設楽郡のタナヘというところの源次という男の話に、若い頃獵師をしていたとき、ある朝早く山へ獵に行くと、松の大木に大きな猿がいるのを見かけて撃ったところが、あいにく急所

を外れたので、猿が松の枝に隠れてしまったので、腹を立ててその木に登って行って山刀を振り上げて斬ろうとすると、その猿が腹を指しては、片一方の掌で拝むを用捨なく打ち殺して持って帰ったところが、それは子持ち猿であったそうです。その年から不幸が続いて、家内が八人と、馬を一三匹失ってもまだ不幸が続くのは、まったくあのおりの猿の祟りだと言っていました。

猿のキンイ

猿のイも、猪のイと同じように、人体に効能のあるものだそうですが、その中にも猿のキンイというのがあって、これは非常に老年な猿でなくてはならないと言います。鳳来寺山玖老勢の丸山鉄次郎という男が、若い頃鳳来寺の山で撃った猿には、このキンイがあったと言いました。黄金色をしていて、入梅にも決して黴が生えなかったと言います。